

最近は、高校生の読書離れがすすんでいると言われています。そこで、今回「楠」では、卒業していく皆さんに、あるいは在校生の皆さんに、ぜひ読んでおいて欲しい本を、先生方に推薦していただきました。ちよつと時間のあるときに、あるいは、何かに行き詰まったときに、ぜひ、先生方が薦める本を手にとってみてください。きっと、そこから、新しい何かが生まれてくるはずですよ。一人でも多くの人が、これらの本を読んでくれることを祈って、それでは、先生方の本箱を公開してみたいと思います。

お忙しい中、ご協力いただいた先生方、本当にありがとうございました。なお、掲載にあたっては、順不同とさせていただきますので、ご了承ください。

池上博 先生 推薦

2 『生命の暗号』 村上和雄

サンマーク出版

この本は遺伝子について書かれたもので、「あなたの遺伝子が目覚めるとき」という副題がついています。

「人はみんなすごい能力の持ち主なんだよ」という言い方は、

けっして慰めの言葉などではありません」というメッセージが全文を通して伝わってきます。

君達の中には、「僕はどうしてこんな頭が悪いんだろう」とか「自分なんか嫌いだ」とか「もつと明るい人間になって、人生をもう一度やり直してみたいなあ」などと考えている人はいませんか。そういう人たちのために書かれたのがこの本ではないかと思われるくらい、これらのことが随所にてきます。

「阻害因子を取り除けば人間の能力は百倍も千倍も発揮できます。人間の能力を抑えている最大の阻害因子はマイナス志向ですよ」と言っています。つまり、悪い遺伝子をOFFにして、よい遺伝子をONにする方法として、どんな境遇や条件を抱えた人でもできるのは「心のもち方」をプラスにすることだと言っているわけです。「プラス志向は良いよ」という

ことだけだったら「それはそうだろう」と君達も言うでしょうが、「これが遺伝子に大きく関わっているよ」と著者は言います。遺伝子がいかにところに顔を出さずです。

最近では、「生命科学は知識人の常識」とまで言われていきます。ぜひ読んでみましょう。この本を読むと生きる勇気が湧いてきますよ。全ての生徒諸君に読んで欲しい本です。

〈関連図書〉

「人生の暗号」 村上和雄 サンマーク出版

「幸福の暗号」 村上和雄 徳間書店

「脳＋心＋遺伝子VSサムシンググレート」

村上和雄・養老猛司・他

ナイトサイエンス教室①「生命の意味」 村上和雄

徳間書店

「21世紀知の挑戦」 立花 隆 文芸春秋

3 『科学的思考とは何か』 竹内 均 PHP文庫

「科学は仮説を積み重ねたものである」というと、「なんだ仮説か」とがっかりする人がいますが、仮説を提出することが科学の神髄であり、科学の面白さなのです。仮説を考え出して、実験によって証明されたときに、正しいと考えるわけです。でも、実験というのは、必ず限られた条件のもとで行われます。したがって、その仮説は、その条件のもとで正しいと認められるだけで、条件が変われば正しくなくなること

だつてあるわけです。

たとえば、ニュートンの力学の法則は、正しいわけですが、絶対的な真理ではありません。つまり、我々が感知できる世界では正しいのですが、光の速度まで加速すると、全く成立しません。

ダーウィンの進化論だつて正しいといわれてきましたが、何十億年も前の地球上でどんなことが起こったかなんて誰も証明しようがありません。でも、いままで見つかつた化石などを調べて、「そう考えるのが一番理屈に合っている」というだけのことです。新しい事実が発見されたら、間違いだつたということになりかねません。

この本は、地球物理学の第一人者である著者が、自然とエネルギー、宇宙と地球の変化、大陸移動、ムー帝国、ストーンヘンジの謎などについて語りながら、科学する心を説いてくれます。君達の知的好奇心を十分満足させてくれる良書です。

理系の大学を目指す諸君は、この本を読んで、大学生生活に向けて少しずつ理論武装していきましょう。コーヒー一杯分の値段で科学の世界を垣間見ることが出来るのですから、安いものです。

〈関連図書〉

「科学の方法」中谷宇吉郎

岩波新書

「科学の目科学のこころ」

長谷川 眞理子

4 『量子力学の冒険』

ヒツポファミリークラブ

学校の教科書には、科学の失敗や間違いは殆どスペースを割いていません。暗中模索、悪戦苦闘、試行錯誤の繰り返しから、偶然とも言える幸運に恵まれ、闇の中で光に出会うということが書かれていません。頼りになる直感や靈感、夢やロマンも無視されています。研究生生活の裏側が書かれていないのです。

たまに、エピソードがコラム欄に載っていることもありませんが、それはおまけで、試験に出ないから、生徒は深く追求しません。科学を豊かにし、大きな発見を生み出した表に出てこない裏の仕事は描かれずに、重要なことだけ暗記すればいいような教科書になっています。

教科書には、常識や通説という本当のことだけが書かれています。それで教育されれば、当然、常識や通説に疑問をもつことはありません。学者になっても、敷かれたレールの上だけを走るようになります。レールの上では面白い研究は出来ません。レールから外れてはじめて面白くなるのです。

この本は「量子力学」など何も知らない素人達が専門家を交えて、侃々諤々議論しながら、過去に導かれたいくつかの量子力学の公式にたどりつくまでの試行錯誤の話が面白おかしく書かれています。「すでに証明されている公式を導いて何になる」なんて言わないで下さい。その手法に意味があるの

です。

この本の最初の数ページをみてマンガ本と勘違いする人もいるようです。さて、この本の面白いところは、量子力学のまったくの素人でも誘導してくれる専門家がいれば、かなりいい線までたどり着けるといことです。悩みながら公式に到達する姿が印象的です。諸君に学んで欲しいのはその手法です。M. Planck、A. Einstein、N. Bohr、W. Heisenberg、E. Schrodingerなどの名前が飛び交います。「科学するとはどういうことか」を教えてくれる良書です。

物理系の大学に進む諸君は一読を！

〈関連図書〉

「フリーエの冒険」ヒツポファミリークラブ

5 『IT革命のカラクリ（東大で月尾教授に聞く）』

月尾嘉男、田原総一朗 アスキー

「月尾教授はとにかく話が面白い。というより、危険なほどに過激だ。東大教授という肩書きが無ければ、彼の話は、どんなテレビ、新聞、雑誌も載せないのではないか。そう思うくらい危ない話が多い」と著者も言うように、読んでみるとなかなか過激でとても面白い。

一部を紹介しましょう。ソニーのハンディカムは値段が三、三、三と増えていくといいます。出荷価格を一とすれば、卸問屋が出す価格が三足して四、中間の問屋がまた三足して

七、小売店がまた三足して一〇〇の価格で売るのでそうです。つまり、例えば出荷価格が一、〇〇〇円とすれば、小売価格は一〇倍の一〇、〇〇〇円という訳です。そんな無茶な！と思う人は多いでしょう。ところが、IT革命が進めば、生産者から直接消費者へと流通経路なしで販売されますから、中間マージンを取る卸売りや小売店が不要になって、もっと安い値段でこれを購入することができるというわけです。

皆さんご存知のように、日本の流通は複雑すぎます。もっと単純にすればいいと思っている人は多いし、また大きな流れとしてもあるわけです。ところが、流通が複雑になっていくということは、その複雑なところで働いている人が沢山いるということです。流通をとことん単純化したら、卸売りや小売で働く七〇〇〇八〇〇万人が失業するということになりかねません。物価は安くなったけど、失業者も沢山出てしまったとなると、どちらが私達にとって幸せなのでしょう。解決の方法はあるのでしょうか。などなど。

全体の文章の流れは、結構政治的色彩の強い本です。だから面白いのですが、情報系の大学や企業に進む諸君は、一度読んでおきましょう。

〈関連図書〉

月尾嘉男教授の著書について

「ポスト情報社会の到来」 月尾嘉男

PHP

「贅沢の創造」 月尾嘉男 PHP

「日本を変える新・成長産業」 牧野昇・月尾嘉男 PHP

「マルチメディア 超企業破壊」 月尾嘉男 徳間書店

「サイバーメディア新思考経済」 月尾嘉男 徳間書店

「元氣な産業意外なビジネス」 牧野昇・月尾嘉男 PHP

IT革命関連

「21世紀の「IT革命」とは何か」 石井威望

青春出版

「アメリカ信仰」を捨てよ」二、三章 石原慎太郎

光文社